

## 九州地域における茶園品種化の推移と今後の問題点

鳥 屋 尾 忠 之

(茶業試験場 枕崎支場)

近年、全国の茶産地で、在来種にかえて品種(さし木による栄養系)への増改植が急速に進み、特に九州でこの傾向が強くなり、すでに専用栽培面積の6割が「やぶきた」などの品種に置き換えられている。そこで、このような実態を調査し、品種導入に伴う問題点を明らかにするために、九州の主要茶産地の品種導入年次の早い農家を対象とした「品種アンケート」を行った。アンケートは、4県9地区の合計58戸の農家(製茶工場)から回答を得て取りまとめたもので、対象農家のほとんどは専業であり、茶園面積268a、導入品種数5.1、品種園率76%(いずれも平均値)であった。

### 茶園面積の推移と品種茶園の現状

日本における茶の栽培面積は、昭和30年代の後半に戦前のレベルの5万haに回復し、その後43年頃から急速に増加して現在ではほぼ6万haに達している(表1)。この40年代の増加は、ほとんど栄養系品種によるもので、図1にみられるように、繁殖方法は従来の種子から一変していることがわかる。なおこの図にみられる、35~38年の新植あるいは栄養系の割合のピークは、紅茶用品種の新植によるもので、緑茶については40年代に入ってから始めて本格的な増改植が行われ、同時にこの時期にさし木による繁殖が一般化していったのである。

沖縄を含めた九州の茶園面積(専用面積)の中で、品種およびやぶきたの占める割合は76%、49%となっており、

表一 茶栽培面積と品種・やぶきたの比率

(昭和51年)

	栽培面積	専用(A)	品種(B)	やぶきた(C)	B/A C/A C/B		
					ha	ha	ha
全 国	59,600	50,100	29,346	22,774	59	45	78
静 岡	21,300	19,600	8,154	7,224	42	37	89
福 岡	1,550	1,340	650	570	49	43	88
佐 賀	1,120	1,030	543	470	53	46	87
長 崎	902	771	435	342	56	44	79
大 分	977	620	616	464	99	75	75
熊 本	2,270	1,650	1,423	1,244	86	75	87
宮 崎	1,820	1,270	985	660	78	52	67
鹿 児 島	7,220	6,000	5,029	2,575	84	43	51
沖 縄	124	124	86	12	69	10	14
九州合計	15,983	12,805	8,767	6,337	76	49	65

注：農林省，茶統計表と府県からの報告により作表。

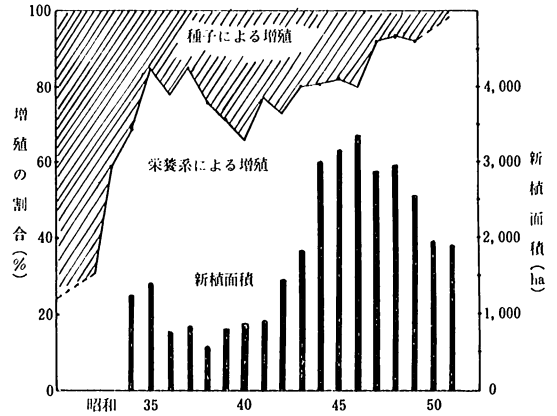


図 1 チャの繁殖方法の変遷(全国)

いずれも全国平均を上回っている。特に、栽培面積の多い鹿児島・熊本・宮崎の品種茶園は昭和43年頃から急速に増加したもので、また、鹿児島と宮崎の両県では、やぶきたの割合が低いことが目立っている。このように、現在の九州の茶業を支える茶園は、他の地域以上に、在来種によるかつての茶園から、栄養系の茶園に変わり、これに伴って従来みられなかったいくつかの新しい問題が生じている。

### やぶきたと在来種の製茶価格

茶の価格の品種間差異は、同一経営の中でも大変大きく、これの高低が品種選択の第一の要素になっている。図2にみられるように、やぶきたは全般に高く、在来種に対する百分率は平均135となり、やぶきたの普及が近年の品質の向上と経営の安定に役立っていることがうかがえる。ただし、暖地の早出し地帯の早生品種は高価格であり、また玉露地帯(福岡県八女地区)の在来種はやぶきたよりも高い。

### 品種の早晚性の組合せと晩霜害

在来種の萌芽日より、やぶきたのほうが7~10日早いことから、やぶきたは春先の晩霜害を受けやすい。しかし、一方でこのことは摘採日、出荷日の早いことにもなり、やぶきた本来の高品質と並んで、製茶価格の高いことを裏付ける理由ともなっている。

アンケートでみられた58戸の品種組合せのパターンは

取り入れた品種数が多いと同時に、導入品種の中でのやぶきたの比率は高く、また今後の増殖計画でもやはりやぶきたを上げる農家が多かった。そして注目されるのは早・中・晩の品種の組合せが、各産地で大きく異なっていることで、この品種選択のパターンの違いは、それぞれの茶産地の立地条件からくる晩霜害の強弱に対応していると考えられる(表2)。例えば、霜害の危険度の少ない枕崎では早生が中心となり、やや危険度の高い大隅地区では晩生に重点が移り、さらに都城・熊本・福岡ではやぶきたよりも早い品種はまれて、やぶきたを早生とする品種組合せになっていることが明らかにされた。

**導入品種の評価と育種への期待**

品種の特長と欠点について、主要品種の評価は産地で若干の差はあるもののむしろ共通しているのが目立ち、特にやぶきたの品質についての高い評価、あるいは、あさつゆ・ゆたかみどり等の早生品種の霜害に関心が集まっている。逆に晩生の品種や在来種は、品質面での難点を指摘されながらも、霜害や摘採期間延長のために評価されている。

以上のように、やぶきたを中心とする品種化の中で、晩霜害が年を追って増加していること、また、摘採期の重なりを避けるために、これに組合せる早生あるいは晩

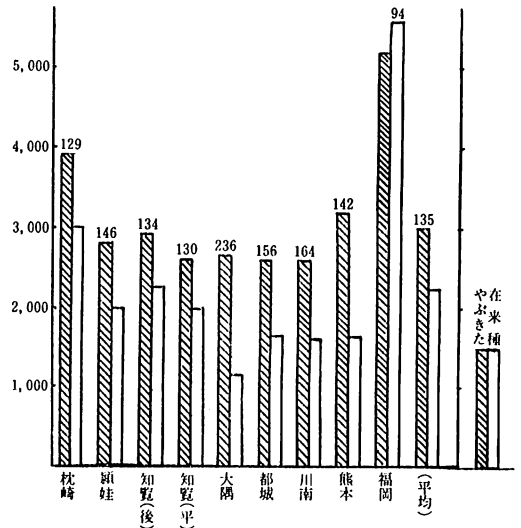


図2 やぶきたと在来種の茶価格 (50年一番茶, kg当り)

生の品種に関心が集中し、そして、やぶきたの炭そ病に弱いことや今後のし好の多様化への対応からも、育種への期待が切実でまた大変大きいことが明らかにされた。

表-2 地域別品種組合せの事例 (品種アンケート, 昭和50~51年)

県 地区		鹿 児 島				宮 崎		熊 本	福 岡											
		枕 崎	頭 姪	知覧,後岳	知覧,平担	大 隅	都 城	川 南	八 女											
早 生	くりたわせ	7	16																	
	やえほ	12						6												
	あさつゆ		18	18	12	6	25	25												
	ゆたかみどり	18	40		39	4	9		4											
晩 生	するがわせ				16	23														
	やぶきた	36	20	18	5	41	18	56	19	27	19	66	64	35	38	16	82	43	80	
	かなやみどり				14				9	4	3	3	15			2				
	さやまみどり							18							5		26	5		
	やまなみ (在来種)	10	4	24	15	27	35	19	10	18		53	36	20	10	14	10	53	12	26
	やまとみどり			18	9			18			11				29	40	3			
その他	18	20	21		9						8	41		10	6	26	2		15	
栽培面積(a)		840	250	165	295	510	340	160	138	660	312	500	390	510	500	190	330	115	100	

注：栽培面積に対する比率(%)